

## 非科学的根拠

田 宮 兵 衛

今年度担当となった2年生の日帰り巡検のテーマを「千川上水の跡をたどる」とした。調べているうちに、元禄九年(1696)に開通したものの、僅か23年後の享保七年(1722)に、大火事の原因となることを理由に、玉川上水系の他の用水等とともに廃止された事実を知った。

廃止は室鳩巢の建議によるとされている。訳が分からないので、東京市史稿に採録されている「献可録」の文章を読んでみた。すなわち、江戸の火災対策についての諮問に対する分析・提案であるが、関連部分を要約すると：①人口が増えれば出火が増え、大風の場合は大火になる。②明暦(1655-58)以後、風が軽くなり上つくので大火が増えた。③明暦前後には水道が開設されている。④水道は地下を縦横に堀り地脈・地気を絶つ。荘子によれば、風は大地の息なので地気が絶えれば上つく。上つけば火をさそい飛火も起こりやすい。⑤また、水道に地下水が抜け土地が乾燥する。そこから生ずる風も乾くので爛火を催す。⑥したがって水道は廃止すべきである。ただし、東南低湿地は井戸水に塩分が含まれ、また南風時の火災は少ないので水道を残してもよい。一方、冬の季節風に際して江戸城の風上にあたる小石川巢鴨の水道は特に廃止が必要である。

後書はこれを江戸時代の非科学的の表れとするものが多いが、いくらなんでも火は水をかければ消えるという常識からの飛躍がひどすぎ積然としない。そこで次のように考えた。

現実には徳川吉宗による享保の改革、幕府財政緊縮という大目的に合うような理屈付けを室鳩巢が担当したのであろう。千川上水設置目的の一つである徳川綱吉の御成御殿である白山御殿は吉宗により薬草園・養生所に変えられている。綱吉の寵臣、側用人から老中となった柳沢吉保の庭園、六義園へも導水がなされていた千川上水の廃止には、綱吉時代の放漫財政の後始末の象徴という性格があることが、小石川巢鴨、すなわち千川上

水、が名指しされていることから推測できる。

なお、江戸市民への都市用水供給については、上水廃止後水売りが増えたとの指摘もあるが、当時井戸堀りの技術が急速に進歩し、ある程度の資金があれば掘抜井戸を持てるようになったという事実が重要であろう。必ずしも上水に頼らなくても飲料水・都市用水が得られるという条件がなければいくらなんでも廃止はできない。

そうすると、室鳩巢の役割は、幕府の政策に都合のよい意見をもっともらしくならべることであり、もとより科学性の問題ではなかった。もし井戸堀り業者と結託していたとすれば、室鳩巢の立場の了解はさらに容易である。あるいはさらに、都市用水廃止の背景にあったと推定される新田開発にからんだ利権もあったかも知れない。

もっともらしい非科学的根拠で政策を粉飾することは珍しいことではない。たとえば今日でも、発電用原子炉に反対する運動に対し、チェルノブイリの原子炉と日本の原子炉は方式が違うから日本の原子炉は事故の心配が無いという説明や、ウランウムを使う原子炉で出来てしまう最も毒性の強い物質であるプルトニウムは高速増殖炉の燃料にすればよい、という一方で高速増殖炉は自ら消費する燃料以上のプルトニウムを作り出すので資源の心配もなくなるという明らかに矛盾した説明、を聞かされて大部分の国民が納得しているかの状況は決して科学的とは言えない。もっとも、非論理的説明が通用しているのは、自然科学が関わらない事象についても同じである。

なお、千川上水はその後も農業用水としての使命は残り、都市用水としても断続的に使用された。江戸時代末・明治初期には工業用水的機能も加わったが、大正・昭和と都市化の進展とともに暗渠化された。昭和46年(1971)には水利権消滅により一部残っていた開渠部分も空堀となったが、平成元年(1989)『清流』復活事業として『下水処理場の処理水』が流されるようになった。